ウィズビーチの仲間たち

（ 七月二十二日、日 ）

午前九時に起床。

十時にホテルから出ると、外は少々の雨模様であった。

雨具の持参は無いのだが、大した雨ではないので、直ぐに上がるだろうと、しばし様子を見る。

さて、今日のこれからウィズビーチ・キャンプ場に向かうバスは、確か、市内のインターナショナル・スチューデント・ハウスを午後二時に出発予定なので、お昼頃までには同所に到着する様に、との説明や施設の所在地住所、連絡先電話番号等の詳細が案内プリントには記載されていた筈なのだが…。 肝心な、その案内プリントと云うのが見当たらない。💦

冷や汗の思いでリュックの中を漁ってはみたものの、何処に行ってしまったものやら見付からないと云う緊急事態が発生した。

日本からの出発時に持出し忘れてしまったのか、或いは、リュックの底辺りにでも隠れているものやら、なかなか見付からない。

否、そう言えば、確か、ヒースロー空港への着陸前には、機内でその案内プリントに目を通して予定を確認した様な気もするので、もしかしたら、機内か或いは昨夜のホテルにでも置き忘れたのだろうか…。

ともあれ、サポートの代理店（学生支援センター）には電話連絡を入れてみた。

「来月からのオープンに向けて、只今準備中です」

とのアルバイト担当者らしき糠に釘の様な応答のみであり、らちが明かずのトラブルとなった。

いきなり、冷や汗の境地に追い込まれてしまったものだが、仕方がないので、最後の手段では近くの目に付いた公衆電話に有った電話帳を手に取ってみる。 その施設の所在を探せないものかと飛び付いたものだが、結果、所在の確認出来たのは幸いだった。 同スチューデント・ハウス迄をバスで移動して、出発の集合場所には時間に遅れることなく、無事に辿り着くことが出来た。（やれやれ…💦）

ともあれ、結果オーライで事なきを得たので実質的な支障はなかったものの、こんな無謀でドジでリスキーな話と云うのは他人様には余り話せたものではない。 土産話にもならない処だろうが、只、物事は良い方に解釈すれば、要は緊急時での臨機応変なリカバリー対応の学習にはなった様な気がしないものでもなかった様だ。😓

バスは午後二時過ぎに同所を出発し、北方約一七〇キロのウィズビーチ・キャンプ場に到着したのは夕刻の五時半過ぎだった。

キャンプに着いて暫くの後、ダイニングルーム兼大広間でのガイダンスがあった。

多分、エジプト系辺りだろうかと思われるアフロヘアのトムと云う人とアシスタントでの延々とほぼ、一時間半に及んでのガイダンスであった。

日常での会話程度ならまだしも、延々とした説明会となると、日本語であったとしても全ては頭には入らないかも知れないのに、それがオール英語なのだから、集中力の続かない身としては、少々、飽き飽きして辛い様な処ではあった。😞

もちょっとは、簡潔に短縮してくれないだろうかとは思ったものだった。

今日から新規参加の約二十名位を含めた全体での参加者数と云うのは、概ね、四十人くらいの様だが、見渡しての女性の参加者数はと云うと、精々、その三分の一くらいだろうか。やや寂しい様な気がしないでもない様な…。

参加国については、ほぼ欧州全域の各国からと、米国、カナダからの各一人と、日本からでは私を含めた男性五人であった。

宿舎の方は、やはり、農場のキャンプ場なのだからホテルの様な快適さを期待しても仕方ない処だろうが、男性用での外観は、かまぼこ形のブリキ波板屋根が四棟あり、室内は只、地面の床に一室八台の簡易ベッドが置かれているだけの部屋だった。

まぁ、三食付きと、プラム収穫等の農作業に参加した日には約五千円相当位のお給金付きで、雨露は防げるのだから贅沢を云う程のことでもないだろう。

我が部屋の入居者は私を含めた日本人の五名とアメリカ人ラリーの計六名であった。

先ず最初に、室内の適当な空ベッドにそれぞれが落ち着くと一人づつでの自己紹介をした。

今回のキャンプでは日本人は、多分にポルトガルに次いでの二番目の多さだろうか。

女性用の方は、別棟の平屋根タイプの建物だった。

（七月二十三日、月）

当キャンプでの本番初日ではあったが、今日の農作業にはゴム長靴が必要とのことであり、持ってないので作業への参加は見送ることにした。
そもそも、「こんな今日の作業のために、わざわざ日本からゴム長靴なんて持って来る訳ないだろ！」とは、内心思ったものだった。
当然ながら、今日の作業参加者と云うのは少数の様だった。
到着来の、まだ、環境にも慣れない初日であり、朝は七時少し前には起床したのだが、作業には不参加となったので、朝食の後には何もやることが無い。
再びベッドの寝袋の中へと潜り込んだ。
一日が長いと云うか、何しろ、夜には二十一時を過ぎないと日が沈まないのだから、日本よりは遥かに一日が長いと云う印象である。
寝ては起き、起きては、また寝て…の繰返ししかないのだが、昼食の後には、また、ベッドにと潜り込む…。
要するに、養老院か何かの施設にでも入所した様なものだろうかとの自覚ではあったのだが、午後の夕方近くになると、隣棟のポルトガル人メンバーとの意気投合になる切っ掛けと云うのがあった。
アレクサンドルが、
「これは、私の祖父の代から作られている貴重なポートワインです。良かったらどうぞ味わってみてください」と云って、丁寧にも、差入れと挨拶にやって来てからのことだった。
どうやら、実家が酒造メーカーなのだろうが、それにしても、なかなか律儀正しいと云うのか、私などよりは遥かに礼儀的であり、機転が利くのにも感心させられたものだった。
早速に、一口づつを味わった後に、
「おい、じゃあ、これから皆でパブに行こうぜ！」
と、誰かが云った。
「そりゃあ、良いなぁ。良し、行こう、行こう」
皆が同調したので、近くのパブ（大衆酒場）に出掛けることになった。
パブでは、さらに親交が深まったものだった。
皆で和気あいあいに打ち解け合い、歓談中には、アレクサンドルが私に対して「エンペラー」と云うニックネームを付けて、呼んだことが切っ掛けとなり、以降では皆からも「エンペラー」と呼ばれるようになり、キャンプでの私の通称となったものだった。

（七月二十四日、火）

午前六時五〇分、起床。
午前中だけでも何とかスッキリと晴れ上がったのは十八日のロンドン到着以来、初めての好

天気だった。
　今日こそは農場の作業にも参加したいとは思っていたのだが、残念ながら、朝のトラックには寝坊して乗りそびれてしまった。目覚ましのアラーム音も何も無いのだから、そんなに朝一番の外の明るさだけで自然に目が覚める程には身体が機能しないのだ。
　かくして、一日の時間を持て余すことになったのだが、「この農場キャンプ以外のウィズビーチと云う町は果たして、どの様な街並みなのだろう」との関心事も湧いて来たので、退屈凌ぎも兼ねて街中へと観光に出掛けてみることにした。モノは考えようでもあるだろうから。
　静かな佇まいの街中に着くと、先ずは、小さな楽器店が目に付いたので中に入ってみた。
　そこで…、
「こんにちは。何かお探しですか？」
と、声を掛けられて来て知り合ったのが色白で優しい眼をした若くて美しい現地地元の女性だった。
　犬も歩けば棒に当たる…とでも言った様な処だろうか。
「いえ、私は一昨日から、この直ぐ近くの農場キャンプに参加しているのですが、日本から来ています。」
「へ～ッ、そうなの⁉ 私はフランセスカ・マリアと云います。ここの近くに住んでいて、このお店ではアルバイトで仕事をしています」
「そうなんですか。私は、サトル・イナヤマと云います。今日は農場の作業に参加しようと思ってたんですが、寝坊して朝のトラックに乗り遅れてしまったので、こうして町の散策に出掛けて来てみたんです。それで、只、フラッとお店に入ってみただけで…」
「そうですか。では、どうぞ、ごゆっくりしていってください。私は、大学で美術を専攻している学生です。将来は学校での美術教師になって、子供たちに美術を教えたいと思ってるの」
「へ～ッ。そうなんですか。どんな絵を描かれるのでしょう？ 出来たら見てみたいね」
「明日は暇があるから、イイよ。午前中に、もう一度来たら見せてあげるよ」
「そうですか。それは嬉しいなぁ。じゃあ、また明日午前に来ますよ」
「待ってるわ。処で、あなたはイギリスに来てから、イギリスのアイスクリームは食べたことあるかしら？」
「いえ、無いです」
「そう。じゃあ、待っててね」
そう云うと、近くの店まで駆けて行き、暫くの後に、アイスクリームを買って来てご馳走してくれた。
「ワ～～～ッ。ありがとう」
（何と云う親切で、しかも、美人で心優しい女性なんだろう…。💕）
　何も買ってくれそうにもない、只、一介の通り掛かりに過ぎない私に…。と、内心では大層な

感激であり、嬉しかった。ありがとうと云う感謝の気持ちが心の中から湧き上がって来たものだった。💕

近くの公園で、彼女の写真を撮ってから別れた。(これだけで済ませて良かったのだろうか…)

夜には、キャンプの広間では「一九四十二年の夏」と云う映画の上映があったので鑑賞していたのだが、後半では眠気が差してきたので部屋のベッドに戻る。

(七月二十五日、水)

七時一〇分に起床。

今日は仕事の割り当てがあったので、そちらの方に出ていれば、五千円相当位の日当にはなったのだが、午前中には昨日の楽器店で知り合ったマリアの作品を見せて貰うという約束があったので、日当のお金を捨てて、お店への再訪の約束を優先とした。

十一時頃にはキャンプを出て、少し歩いてから車を拾って町中へ。そして、店へと着いた。

「やぁ、こんにちは。昨日はどうもありがとう。昨日のアイスは本当に美味しかったよ」💕

「いぇいぇ、どう致しまして。あなたに約束していた私の作品を幾つか持って来たわ」

数点の絵画作品をテーブルの上に広げて見せてくれた。なるほど。美術教師を目指していると云うだけあって、憧れる程に素晴らしいものばかりだった。

「これはねぇ。ビールとレモンのミックスされたものなのよ。どうかしら?」

と云って、ビールの様な飲み物を差し出してくれた。アルコールには弱いのだが、確かに、口当たりは良かった。

「今日はねぇ、十二時半にはお店を閉めなきゃならないの。貴方が、もう少しは早めに来てくれると思ってたわ」

「エ〜ッ! そうなんですか? じゃあ、もう少し早起きをして、早めに出てくれば良かったなぁ。ごめんなさい」

折角の機会ではあったのだが、残念ながら、私の朝の時間が遅かったばかりに、一時間と少々位の時間しかなかったが、お店のシャッターを下ろすまでの彼女とのひと時であった。

帰りには女店主の車で、帰路の序でだからと、キャンプまでは送り届けてくれた。

もう少し、早めに着くように向かえば、もっと、ゆっくりした話も出来て、さらには、ストーリーの発展性もあったことだろうかとの後悔の念が少々あった。

わざわざ、私のために自宅から数点の作品を持ち出して来てくれていたと云うことは、彼女にとっても、私の到着時間が遅かったことでの心配があったのかも知れないし、時間が短かったのは彼女にとっても残念で、物足りなかったことだろうかと…。

それにしても、お店での、これ程までに親切で優しい店員さんに遭遇したケースと云うのは人生初と云える程の貴重な体験であり、感激させられたものだった。

早めにキャンプに戻った処で、作業に参加しなかった日の日中には何もすることが無いのだが、仕方がないので、また、ベッドにでも潜る以外ない。午後四時頃までの昼寝とした。

夕方近くにはフィンランド人のニーナとウーラの二人と一緒に写真を撮ったり、持参の八ミリフィルムカメラで撮影したりして過ごした。二人とも穏やかな性格であり、私には愛想が良い。

夜の七時半からの一時間は英会話教室が有ると云うので参加した。

（七月二十六日、木）

今朝方に見ていた夢は、生まれて初めての英語内容での夢だった。少しは現地で馴染んだと云うことだろうか。

今日は仕事での割り当てが無かったので、何もやることが無い。

暇な一日となったので、日中にはポルトガル人グループとのサッカー試合をやることになった。

否、サッカーの試合とは云っても、まともなコートやゴールの設備が有る訳でもないのだから、只、原っぱでの彼らの部屋グループと我が部屋グループ対抗での草試合ではあるのだが、それでも、一応は国際試合となるのだから安易に負ける訳にも行かないと云う意気地は湧いて来る。必然的に力が入ってしまうものである。

審判も居ないので、点数や勝敗のこと等はあやふやで、良く分らないながらも、久し振りでの良い汗をかき、また、盛り上がったものだった。それなりには疲労感も伴った。

夕食の後には、広間のテーブルでニーナと話をしながら、少々、日本語を教えたりもしていた処に、ラリーが割込みの邪魔者で入って来たので三人となった。😥

「ねぇ、私はエンペラーの歌が聴きたいわ。一曲だけでもイイから何か歌ってよ」

「エ〜ッ。そんなぁ、無理だよぉ。歌詞カードもないし、マイクとかアンプスピーカーもステージもない。それに、伴奏も何も無いんだから、そんな気分にはなれないよ。無理だよ」

「そうだよ、エンペラー。一曲だけでいいんだからさぁ、何か歌ってよ。ニーナがリクエストしてるんだから…」

と、ニーナからの要請に加えて、さらに、ラリーまでもが煽って来た。

「ねぇ、お願いだから、一曲だけでいいから歌ってよ。お願い…」

再度、ニーナがニコッとした愛らしい上目遣いでの追い打ちを掛けて来た。

“エンペラー”と云う私の愛称は、過日のポルトガル人のアレクサンドルがパブでの歓談の機会に勝手に付けて呼んだニックネームではあったのだが、早速と云うのか、翌日からはこのキャンプでの私の通称として全員にまで行き渡り、誰からもそう呼ばれるようになっていたものだった。

それに、ニックネームで呼ばれるようになったのはキャンプ全体でも私だけだったので、顔と名前の一致で全員には直ぐに憶えられた様なものだった。本来の正式な名前では記憶には残り難いものだが、私の愛称だけは全員に通じて行き届いていた様なものだった。

ともあれ、カラオケでもあるならまだしも、この時代には、そういう設備などは世界中の何処にも無いのだから、そんな気分にはなれる訳もない…。😓

只、ラリーからの要請だけならどうでも良いことだが、ニーナからの上目遣いでニコッとされると弱い…。💦

(それからの五十年後の我が末娘が何かをねだる時と、ほぼ同種の共通した一瞬の表情ではある。😥)

「仕方ないなぁ。じゃあ、ちょっとだけだぞ〜。マイクもアンプ・スピーカーも何も無いんだから

気分が乗らないんだけど…。じゃあ、ギターを持ってるつもりで…」と云うことで、仕方ない。ボブディランの「風に吹かれて」の一曲を、エア・ギターを抱えての披露と相成った。😓

How many roads must a man walk down …あんでだろうn
どれだけ歩き続けたなら 人は大人になれるだろう？
あゝ、どれだけ海を越えたなら 白鳩は休めるだろう？
あゝ、どれだけの弾が飛び交ったなら 人は戦いを終わるだろう？
それはねぇ、友よ
吹いている風が知ってるよ
吹いている風だけが知ってるよ
（ボブ・ディラン作『風に吹かれて』の英語歌詞一番より翻訳）

それにしても、何故に、ニーナが私に歌のリクエストをして来たのかは全く解らないのだが…。何でだろう…。何でだろう…。もしかしたら、過日の英会話教室か、或いは、ミーティングの機会の自己紹介の時に、何か口が滑ったのだろうか…。

金髪のニーナは何処となく上品で清楚なイメージであり、賢そうな雰囲気もある。そして、可愛らしい。

折角、親しくなれた様なものだが、今度の日曜日にはキャンプ・メンバーの半数が入れ替えになるので、その機会には去ることになると云う。人生ここまでの縁であり、一抹の侘しさが過ぎる様でもある。😳

夜には広間での初めての卓球試合をやっていたので一ゲームだけ参加した。

こういう時にも、一応は国際試合という意識が頭の中では自然と働くもので、つい、本気度全開になってしまうのだが、結果は一戦しての一勝だった。初の国際大会(!?)での一戦一勝無敗であり、先ずは、負けなくて良かったと安堵した。

田舎での高校時代には部活動の部員ではなかったものの、部員メンバーを相手に、昼休み時間には毎日の様に卓球を楽しんでいたので、こ

の機会にも相手側がスペシャリストでない限りでは、それなりでの自信は有ったのだが、高校時代での経験が生かされた様なものだったろう。

（ 七月二十七日、金 ）

今日は全員にとっての仕事自体が無かったので、朝食は九時からだった。

何処かに行くと云う当てもなく、やることも無いので、日本の友人たちへの絵葉書を書いたりして出しておいた。

日の出から日没までの一日が日本の東京辺りよりは四、五時間くらいは長い様なので、日中での何もやることが無い日には、とにかく、部屋には簡易ベッドだけと、あとは、ダイニング広間のテーブル以外には何もないのだから、時間を過ごすのも大変と云えば、大変ではある。

前日の、原っぱでの草サッカー試合では、余りに久しぶりでの本気出しの運動ではあったので、身体のあちこちでの筋肉痛がある。

夜の十時からはダイニング広間ではテーブル類を片付けてのダンスパーティーがあり、初参加した。

否、名目ダンスパーティーとは云っても、実際には、ディスコパーティーと云った方が的を得ているのだが、日本とアメリカ、カナダと欧州を含めた十数カ国からの若者達が四十数人も集まってるのだから、それは、大変な盛り上がりがある。

曲の方は、日本ではまだグループ名も曲も聞いたことが無かったのだが、どうやら、現地イギリスでは爆発的売出中の、ディープ・パープルのLP盤が何度も何度も繰り返し流されていた。

毎日のランチタイムと夕食団欒のひと時にも流されていた曲ではあるのだが、また、この薄暗い照明と大音量の中でのディスコタイムの時には若者達からの、ほとばしる様な熱気とエネルギーで溢れ返った様な空気があった。

只、パーティーでの残念な処と云えば、全体での女性人数が少ないというアンバランスな問題である。 結果、女性はあちこちからの引っ張りだこになってしまうと云う、男性陣にとっては、数少ない女性を如何に自分や自分達のグループに誘い入れるかと云う難儀な事情ではあった。

一部には、素早く一対一でのペアになり、部屋の片隅の薄暗い所に座り込んでは、すっかり出来上がっている様な、何組かのにわかカップルも居たのだが、我が部屋男子グループに参加してくれたのは、マリーとイレーヌとニーナとウーラとマリアくらいだったろうか。

まぁ、人数の比率からしたら、悪くもない成績だったのかも知れないが…。

今日のニーナは何となく陰りがある様な、元気が無い様な印象ではあった。

それでも、何度かはグループ内にも入って来てくれたので良かったとは思うのだが、ニーナとウーラは明後日の日曜日には他の約半数くらいの面々と共に、このキャンプを去って行く予定

なのだから、多分に、それでの寂しさの様なものが有ったのかも知れないだろうか…。
時間無制限のパーティーの方は、いつ迄も延々と続いて、なかなか終わりそうにも無いのだが、我が部屋グループは午前二時を過ぎた辺りで退散した。その後も未明の午前三時過ぎ辺りまでは続いていた様だった。

（七月二十八日、土）

今日は朝から、オプション参加でのノーウィッチへのバスハイクの企画があったのだが、前夜のパーティーでの夜更かしによる寝坊で、バスの出発に乗り遅れての不参加となってしまった。😨
バスハイクも、当初からでは、それ程の参加意欲があった程でもなかったので、「まぁ、いいや」くらいには思っていたものの、後になってみると、やはり、貴重な機会を逃してしまった様な気がしては後悔したものだった。😨
参加費の五十ペンスも既に、ガイダンスの機会に支払ってあったので猶更の悔いではあった。

（七月二十九日、日）

キャンプでの一週間を過ごした日曜日の午前には、ここで二週間を過ごした約半数メンバーの退場があり、我々居残り組総出での見送り会があった。
最後の別れ際でバスに乗る際には、全員の一人一人が握手の手を差し出して来たのを固く握り返す。
私は、八ミリフィルムを回していたので気付くのが遅れたのだが、ニーナとウーラがバスに乗ろうとする寸前に私の手を取って握手を求めて来た時には少しの驚きでもあった。その手を強く握り返すと、彼女たちの潤んだ眼差しには、哀愁感が漂っている様だった。
共通の期間は一週間と云う短い期間だったのだが、毎日の食事会や週二回か三回のダンスパーティーをも含めた、ほぼ一日の大半の時間を共にして顔を合わせていたのだから、経過した日数の期間以上に、それなりに密度が濃かったとは言えるだろう。
バスに乗る時には、特に、女子の中には泣いていたり、顔を伏せて泣きそうな顔の子たちが多かった。
人生は、出会いと別れの繰り返しであり、ここでの楽しかった日々の後での、実質、これが今生の別れとなるのだから、一抹の寂しさが漂うのは否めない。

（同日の午後）

「ヘイ‼ ラリー‼」
「オ〜、何だい？ エンペラー」
「今日は何の日か知ってるかな？」
「エッ⁉ 何？ 何かあったかな？」
「何だ、知らないのかい？」
「知らないけど、何かあったかなぁ」
「教えて欲しい？」
「あぁ。何だい？ 早く教えろよ‼」
「そうかい。じゃあ、仕方ないなぁ、教えるか。実は、今日はオレのバースデイなんだよ。何かないんだろうか？」
「オ〜ッ‼ そうかい。そりゃぁ、おめでとう‼ じゃあ、ちょっと、こっちに来いよ。」
と、広間のダイニングへと私を誘ったので付いて行く。
「お〜い、みんな‼ 今日はエンペラーのバースデイなんだぞぉ。誕生会をやろうぜ‼」
と、居合わせた女性陣や周囲にも声を掛けて誘い入れてくれた。
　早速、有り合せのビスケットや茶菓子類と飲料などをかき集めて、私を囲んでの“ハッピーバースデイ”を歌い、細やかな誕生会なるものを開いてくれた。
「やぁ、皆さん、今日は私のために、わざわざお集まり頂いてありがとうございます。いやぁ、別に、催促した訳じゃあないんだけどなぁ…💦。ラリーが…😓」
とか何とかの簡単な挨拶をする。
ともあれ、しばしの歓談の場を設ける口実としては良い機会にはなった様なものだった。

「今日のこの後には、二〇人くらいの女子グループが到着するらしいヨ」
と、誰かが云った。
「ワ〜オ‼ そりゃあ、凄いなぁ‼」😳
と、誰かが反応した。
一瞬のザワ付きと、他の男子の面々にも、思わずニヤけた満面の顔色が出ていた様だが、一方の女性陣の間には一瞬の冷ややかな空気が流れた様な気がした。
　結局、第一陣のバスで到着したのは大半が女子で、男性は三、四人だったようだ。
第二陣の到着では男性の方が多かった様だった。
　結果的には、全体での男女比率が七対三くらいだったのが、六対四くらいか半々近くにはなったのかも知れない。

　何れにしても、夏休みの若者達にとっては、日本人の発想からでは到底、浮かばない様な、楽しくて魅力的な企画内容とアイデアが盛り沢山なキャンプであり、合理的な農場運営システム

だなとは、つくづく感心させられたものだった。
今の私が、もし、それなりに大規模の農場経営者だとしたら、繁忙期が夏休みと重なるのでさえあれば、是非、取り入れてみたいようなシステムだなとは思ったものだった。
日本の置かれている様な地理的環境からでは、なかなか、欧州の様には行かないだろうが…。

（七月三十日、月）

午前中は、やはり、これ迄同様にどんよりした曇り空で、長袖シャツ一枚では肌寒い様な天気だったのだが、午後には急速に回復して、久し振りに…と云うよりは、英国到着以来での青空を見ることが出来た様なものだった。
空が晴れて来ると、やはり、真夏の強い日差しであり、暑くなって来たので、早速、長袖から半袖シャツに着替えたものだが、それでも、まだ汗ばむような暑さとなった。
午後には、久し振りに風呂に入り、シャツやスラックスの洗濯をやる。
夜にはまた、十時頃からのディスコパーティーがあるのだが、それにしても、私自身も含めて、やはり日本人仲間と云うのは全般的に大人しいと云うか、こういった場面での女性へのアプローチにしても、どちらかと云うと欧米人に比しては消極的なのであり、彼ら程に積極的にはなれない側面はある様だ。

（七月三十一日、火）

初めての英国に到着して以来の朝から晴天らしい晴天となった。
日中の気温にしても、昨日の午前と比べれば、いきなり、十度くらいは気温も上がったのだろうか。
今日こそは仕事に参加しようとの思いではあったのだが、昨夜来の寝不足では、なかなか朝の目覚めが良くなかった。
洗顔もしないままに朝食を摂り、農場行のトラックに乗ろうとはしたのだが、マネージャーのトムから「今日は、もう遅いので明日にしてください」と云われて、トラックには乗せてもらえなかった。
仕方なく、予定が空いたので、午前中は昼寝に充てて、午後には、日本の知人、友人、身内等への手紙を書いて出したり、居残り組との歓談で過ごす。
夜の九時半からは、ダイニング広間での十六ミリフィルムの「ロード・オブ・ザ・フライズ」と云う古いモノクロ映画の上映があった。

（八月一日、水）

今日こそは、仕事にも一回くらいは参加しようとは思っていたのだが、農場行のトラックがいつもよりは早めに出てしまったので参加が出来なかった。
多分に、予定人数が早めに埋まってしまったことで早めに出発してしまったのだろう。
昨日来の暑い一日ではあったが、クワイエット・ルームでは絵を描いたり日記を付けたり、居残り組との談笑で過ごす。

（八月二日、木）

今日は、予め、掲示板には仕事の割り振りがしてあったので、とにかく、せめて一度くらいは体験しておかねばと云う気持ちも有り、少なからず張り切ってはいたのだが、農作業にも無事に参加出来ての一日を終えた。
今日の仕事内容は、リンゴの木の新芽折りだった。
参加の皆でのワイワイ、キャーキャー言いながらの農作業と云うのは、左程の苦になる様な作業ではないので、むしろ、結構楽しくて、良い経験にもなったものだった。

時に、作業から帰って来てからの相部屋のラリーの話しでは、明日朝にはキャンプを出て、ヒッチハイクでスコットランドのエジンバラへ向かうと云う話しだった。
夕食の後なので、腹が減ってる訳もないのだが、相部屋仲間の皆で、街のチャイニーズレストランでの送別会をやろうと云う話しになり、出かけた。
また、その後に、一旦は戻って来てから、再び、今度はいつものパブでの二次会に行こうと云う話しになり、出掛けたものだった。

（八月三日、金）

朝早々に、ラリーが発つ時には、相部屋の我々と一緒に写真を撮ったり、仲間の一人一人との軽いハグと握手を交わして彼は旅立ち、その後姿を見送った。
同部屋のベッドが一つ、歯が抜けたように空いたのは、これが今生の別れでもあり、寂しい気がしたものだった。

期間としては、只の二週間のことであり、年月の単位と云う程のことではないのだが、朝から晩までの殆ど一日中を狭い同部屋とエリア内での顔合わせの中で過ごしていたのだから、正に家族の様な親近感にもなっていたことだろう。

仮に、月に一度か二、三カ月に一度くらいの顔合わせでの五年、十年と云うのよりは、遥かに感覚も身近に感じられていたものかも知れないだろう。

その日の私の日記には、珍しくも英文での記載が残っていた。

「人生は長大なドラマである。実に多くの人々との出逢いと別れの繰り返しであり、然しながら、それら出逢いの機会で遭遇する人々と云うのは人世の中での、ごく一部の限られた人達なのだ」との趣旨内容だった。

つまりは、『袖触れ合うも多少の縁』を英文にしていただけのことなのだが、その時の心情としての記録ではあった。

何れにしろ、私にしても明後日の日曜日には出立するのではあるが、明日には同部屋の千村君もエジンバラへ向けて出立すると云うので、さらに、今夜も我々相部屋仲間での送別会をやる話になり、いつものパブに出掛けることにした。。

（八月四日、土）

午前十時半頃には千村君がキャンプを去って行った。

さらに、部屋のベッドが空いたので、室内の空間にはさらに侘しい空気が流れたものだった。

私自身においても、この日の朝か、或いは明日に出立する旨、周囲には伝えてあったことなのだが、一方では、やはり、後ろ髪が引かれる様な心境でもあった。

今夜のダンスパーティーには参加してみようかと云う気にもなったので、予定通りに、もう一泊することにした。

昼間には、クワイエットルームでのんびりしながら、ここのキャンプのスケッチ（挿絵参照）を描いていた時にマリーからのひと声があった。

「あら～、素敵ねぇ。上手いじゃない⁉」

「あぁ、ここでの思い出に…。忘れないうちに描いておこうかなと思ってね。何なら、君の似顔絵でも描いてみようか？」

「エ～ッ！ 描いてくれるの～。じゃあ、お願いしま～す」

との流れとなった。

そもそも、普段からの絵心などが有る訳でもないのであり、人様の似顔絵を描くなどと云うのは人生この方、一度も経験など無いのだが、かと言って、折角の申し出を断る程のことでもない。

ポーズを決める彼女の斜め横顔を概ね、七、八〇cm程度の超至近距離からマジマジと観察しながら、鉛筆を走らせることに相成った。

マリーは、ショートの黒髪が似合っていて、明るくて愛想の良いフランス人の女の子。十八、九か二十歳くらいだろうか…。

それなりには頑張っていたところに、イレーヌが近付いて割り込んで来た。

「私にも描いてよ」と。

「じゃあ、マリーが終わったら、次にだね。何処か他の場所にでも変えてみようか?」

と云うことで、次には、隣接する土手の原っぱへと移動した。

イレーヌは赤茶系髪で、少し、フワッとカールしたようなセミロングの落ち着いた雰囲気のポーランド女性。やはり、二十歳くらいだろうか…。

それにしても、うら若い女性の顔をこれ程迄の超至近距離からじっくりと時間を掛けて眺めながら似顔絵を描くなどと云うのは、人生初体験の出来事であり、おそらくは、最初で最後の機会にはなるのだろう。

何となく、自ら、鼻の下が長くなりながらも一生懸命に描いていた様なものだろう。医者の経験は無いものの、或いは、藪医者が、内心ではワクワクしながらも、妖艶なご婦人の患者さんに聴診器を当てながら体裁を繕っている様なものだろうか。或いは、なかなか思う様に上手く描き難いのは、そもそものそういった邪心が禍していた側面も否定は出来ないのかも知れないだろう。

ともあれ、提供物には二人とも受け取って大いに喜んでくれたのだから、結果、オーライと云うことにしておこう。

その後に、イレーヌとは原っぱに座しての、暫くのマッタリした時間を過ごすことになった。

「今日は天気が良くて気持ちがイイよね」

「そうよね。エンペラーは来週ここを出たら何処に行くの?」

「う〜ん。予定や予約と云うのは何も無いけど、ここを出たら、先ずは、ヒッチハイクでイギリスを一周して、その後は、大陸に渡ったら、オランダやドイツとか北欧の方を廻ってから、また南下して来る様な処かな。オランダのアムステルダムには、日本人の友達のお兄さんが働いている大きなホテルがあるけど、そのお兄さんの所にも立ち寄ってみようとは思ってる。そして、北欧の方を一巡して、南下して来た後にはフランス、イタリアとか南部の方かな…」

「いいわねぇ。私も、そんな旅行がしてみたいよ。一緒に連れてってよ。(笑)」

「それは、いいなぁ。(笑) 日本の古い言葉に、『タビハ ミチヅレ ヨハ ナサケ』って云うのがあるんだよ。」

「エッ!? 何?」

「タ ビ ハ・ミ チ ヅ レ・ヨ ハ・ナ サ ケ」

「タ ビ ハ・ミ チュ ジュ レ・ヨ ハ・・・? どういう意味?」
「“タビ”と云うのは『旅行』のことだよ。“ミ チュ ジュレ”ではなくて、“ミチヅレ”だけど、これは、『一緒に』と云う意味。“ヨハ”は『世の中』のこと。“ナサケ”と云うのは『思いやり』、人に対しての『優しさ』とか、そういう意味だね。だから、旅行は一人でよりは話し相手のパートナーが居た方がより楽しいし、例えば、美しい景色も一人で眺めるよりは二人で楽しめれば二倍の楽しみにもなる訳だよね。世の中だって、お互いに相手を思いやる優しさの気持ちが大事だよね。だから、そういう意味なんだよ」。
「へ~ッ。素敵な言葉なんだね。(笑)」
「君はこのキャンプが終わった後にはどうするのかな?」
「私は、ポーランドに帰ったら、九月からは大学が始まるわ」
「そうか…。このワイズビーチのキャンプが学生時代での良い思い出だよね」
「ええ。本当に楽しかったわ。それに、貴方とも、こうして話が出来たりして…」
「いや~。俺だって、本当に良い思い出になったとは思ってるよ。君と、こうしてのんびり話が出来ただけでも良い思い出だよ」
「ねえ、サトル!」
「何?」
「貴方にとっては、国際結婚と云うのは出来るの?」
「エッ!? ケ・ッ・コ・ン…」
彼女の発した突然のひと言は、その時の彼女の雰囲気や穏やかな優しい表情とともに記憶の奥深くに突き刺さる様なひと言ではあった。
真剣そうな、好意的な気配と云うのは感じないものではなかったが…。
只、正直な処では、その“結婚”という二文字については、まだ、日本女性との交際経験さえ無かった様な未熟な身でもあり、一方では自分の生活さえままならないという現実がある。
予期しない突然の問いには、一瞬、言葉に詰まった様なものだった。
後になっての、冷静に考えた上での応答としてならば、
「恋愛に国境なんて関係ないよ」
とでもカッコ良く応じていた方が、それはそれで良かったのかも知れないだろうか…。

或いは、もしかしたら、何某かの良い方向への進展の可能性を残したのかも知れないだろうが、後々にも、少々尾を引いてしまった様な気がしないものでもなかっただろうか。

只、如何せん、時間が足りな過ぎたのは否めない処だろう。

多分に、ヨーロッパの中でもポーランドやフィンランドと云うのは昔からの親日国と言われている様な国でもあるので、それ故に、日本か或いは、日本人への憧れの様なものがあっての、私への関心と云うのがそれなりには有ったのかも知れないだろうか。

何れにしろ、人生上では、ホンの一瞬のボタンの掛け違えや、或いは、瞬間のひと言で、その後の人生の流れと云うのが大きく変わってしまう可能性も時にはあることだろう。

また、その時々での判断や選択と云うものが、果たして最良だったのか否かという点についても、その時点では不透明な場合が少なくないのであり、最終的には、人生の終わりが近づいた頃に至って初めて、漸く少し理解の及ぶ処なのかも知れない。

所詮、人は不完全なので、しばしば、判断の過ちを冒すものなのだから。

夜のダンスパーティーでは、正直な処、余り、そんな気分には乗れないで居たものだが、イレーヌからの手の差し出し、誘いがあったので、それに同調して乗れたのが、せめてもの、最後の気慰みみたいなものだったろうか。

（八月五日、日）

二週間のキャンプ場生活が終わったので朝食の後には出立を予定していたのだが、前夜遅くまでのパーティーからの寝不足で朝の目覚めはなかなか辛いものだった。

午前中には、同キャンプを退所するメンバーの迎えのバスが到着するのだが、私は、その前にヒッチハイクで旅立つことにしたので、皆からの盛大な(!?)見送りの声援を背に受けながらの出立となった。

一人一人との握手を交わしながらの別れ際、固く手を握り返して来たイレーヌの手の温もりと、物悲しそうな憂いの眼差しは、前日の話の続きか何かを語り掛けている様な気配を感じたものだった。